

武蔵野

ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

—むさしの文学館 #4—

武蔵野市ゆかりの

文学者たちの人生、作品世界、
市との関わりなどを紹介します。

金子光晴

かねこみつはる



戦後間もなく、50代の頃の金子光晴（銀座にて）。光晴は、今年生誕120年、没後40年を迎えます。

中学時代に文学と出会い 父の遺産で第一詩集を出版

かつて、吉祥寺駅北口を降り、「サ
ンロード」に入って1分ほど歩
くと、右手に小さな古書店がありまし
た。店の名は「さかえ書房」。この
店の看板と書皮（ブックカバー）は、
「反骨の詩人」と評された金子光晴
の筆によるものでした。

金子光晴（本名・安和、後に保和
を名乗る）は、明治28年、愛知県海東
郡越治村（現・津島市下切町）で大
鹿和吉の三男として生まれました。
一家は代々、酒屋と廻船問屋を営ん

ていましたが、明治24年に起きた濃
尾地震で酒蔵と持ち船を失い、破産。
1歳の時に、建築会社の名古屋支店
長だった金子莊太郎の養子となりま
す。養父の転勤に伴い5歳で京都、
10歳で東京へと移り住みました。

中学生のときに古今の文学作品を
読み、作家を志すようになった保和
は、大正3年、早稲田大学高等予科
文科に入學しますが、自然主義文学
の空気になじみず、翌年中退。その
後、東京美術学校（現・東京芸術大
学）日本画科、慶應義塾大学文学部
予科に学ぶも、いずれも中退します。

19歳頃から詩作を始め、大正5

年、20歳のときに養父が他界。多額
の遺産を相続します。その金で第
一詩集『赤土の家』を自費出版しま
すが、ほとんど反響はありませんで
した。同年、出入りの骨董商から欧
州の旅に誘われ、最初の洋行へ。神
戸からロンドンを経て、ベルギー・
ブリュッセル郊外の下宿に約1年
半滞在します。この頃に書きため
た詩は、帰国後に詩集『かね蟲』へ
と結実。このときから「光晴」を名
乗るようになります。

足かけ5年にわたる極貧放浪と 疎開先での「家族の時間」

光晴が、後に伴侶となる森三千代
と出会ったのは、関東大震災の翌年、
大正13年のことでした。作家志望
だった三千代は、東京女子高等師範
（現・お茶の水女子大学）に在学中で
したが、妊娠の事実が学校に知れ、
退学処分となってしまう。二人
はこの年に結婚。翌年、長男・乾が
誕生します（後の仏文学者・森乾）。

昭和3年、幼い乾を妻の実家に預
け、三千代を伴って約5年にわたる
東南アジア・ヨーロッパ放浪の旅
へ。額縁作り、旅客の荷箱作り、行
商など考えられる限りのアルバイト
トをしてパリで食いつなぎ、シンガ

来歴

明治28(1895)年	12月25日、愛知県海東郡越治村で大鹿和吉の三男として生まれる。本名は安和、後に保和を名乗る。
大正 3(1914)年	早稲田大学高等予科文科に入學。翌年中退し、東京美術学校日本画科に入るが、すぐに退學。慶應義塾大学文学部予科に入るが、翌年退學。
大正 5(1916)年	養父が亡くなり、多額の遺産を相続するが、第一詩集『赤土の家』の自費出版（大正8年）や、最初のヨーロッパ旅行（大正8～10年）で使い尽す。
大正12(1923)年	『かね蟲』を刊行。光晴を名乗る。
大正13(1924)年	東京女子高等師範の女学生だった森三千代と結婚。
大正14(1925)年	訳詩集『フェルハレン詩集』『近代仏蘭西詩集』を刊行。
昭和 3(1928)年	約5年にわたる東南アジア・ヨーロッパ放浪の旅に出る。
昭和12(1937)年	詩集『鯨』を発表し、高い評価を受ける。
昭和13(1938)年	武蔵野町吉祥寺に転居。
昭和23(1948)年	『落下傘』『蛾』を発表。
昭和27(1952)年	詩集『人間の悲劇』を刊行、翌年読売文学賞受賞。
昭和32(1957)年	自伝『詩人』を刊行。
昭和46(1971)年	5年間の海外放浪を回顧した『どくろ杯』を刊行。その後『ねむれ巴里』『西ひがし』と三部作を刊行。
昭和50(1975)年	6月30日、気管支ぜんそくによる急性心不全により自宅で死去。享年79歳。



光晴が埋め立てに反対した、玉川上水。昭和61年に都の清流復活事業により水流が復活、平成15年に国の史跡に指定される。



明治30年、金子家の養子となった光晴(中央)。左端が養父の金子莊太郎



昭和6年、パリ・シャンゼリゼ通りでの光晴(右)と三千代(中央)



昭和40年、吉祥寺の自宅にて。当時69歳の光晴(右から3番目)と、三千代(右端)、長男・乾(左端)

ポール、マレー半島を経て、昭和7年に帰国します。そして昭和12年には『鮫』を出版。批判的リアリズムの視点から軍国主義を批判した作品は高い評価を受けます。光晴が吉祥寺に転居したのはこの翌年、42歳のときでした。

その後、第二次世界大戦が勃発。ぜんそく持ちの乾に召集令状が届くと、光晴は閉め切った部屋に乾を寝かせて松葉をいぶしたり、水風呂に入れたりしてぜんそくの発作を誘発し、召集から逃れさせました。昭和19年、一家は山梨県の山中湖畔に疎開。幾度かの旅や放浪を繰り返

返し、家族とも離れていた光晴は、ついに一家でこたつを囲んで過ごす「家族の時間」を得たのでした。そして昭和21年、光晴50歳のときに疎開先から吉祥寺に戻ります。

反骨精神を貫きつつ 悠々と、飄々と歩んだ生涯

戦時中は主として「抵抗と反戦の詩」を書き続けた光晴。その作品群は戦後、『落下傘』『蛾』『鬼の児の唄』として矢継ぎ早に刊行されました。敗戦後の詩人たちの多くがぼうぜん自失しているさなか、光晴の活躍は、戦後に詩を書き始めた若い詩人

たちに多大な影響を与えました。昭和27年詩集『人間の悲劇』を刊行し、翌年に読売文学賞を受賞。『人間の悲劇』No.5の冒頭には、こんな一節があります。詩人の生涯を貫く姿勢の一端が示された言葉といえるでしょう。

正しい意見とされてゐるものを、吾人はよくよく警戒しなければならぬ。

正しい意見はその正しさにもたれる重力でゆがみ、決してくるふはずではなかった方角へ外れがちなのだ。

(筑摩書房『定本金子光晴全詩集』)

その後、75歳を過ぎて書かれた自伝三部作『どくろ杯』『ねむれ巴里』『西ひがし』を刊行。その反骨精神は晩年になっても衰えず、当時の若者たちからは憧憬を込めて「酒脱なフーテン老人」などと呼ばれることもありました。

昭和41年、前年の淀橋浄水場(新宿区)の廃止に伴い、玉川上水の役割がなくなつたとして、上水を埋めて道路にしようという計画が持ち上がる。光晴は詩人の野田宇太郎ら文化人とともに「玉川上水を守る会」を結成して反対運動を起こします。その後、市民で構成された武蔵野市緑化市民委員会もその運動に加わり、自然を守る市民活動は脈々と受け継がれていきました。こんなエピソードからも、光晴が武蔵野市に残した足跡を感じることができま

す。そして昭和50年6月30日、光晴は、気管支ぜんそくによる急性心不全により自宅で静かに世を去りました。悠々と、そして飄々と生きた79年の生涯でした。冒頭で紹介した古書店「さかえ書房」の書皮には、こんな言葉が記されています。
書は以て心の糧とすべし